**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第６４回　（２０２０年６月１４日）**

**・第６４回の勉強範囲：「第三章　ヴィディヤー・シャーゴル訪問」３８頁**

**（前回の補足）**

サンスクリット語「ミッティヤー」について再確認。

・ミッティヤーとは、永遠（実在）に見えるが永遠ではないもの。非実在。たとえば人間の身体や心。

**（今回の勉強）**

前回の最後に「安定した深い信仰の印とは何か」を説明しました。神への信仰には2種類あり、（前回も話ましたが）１つは、たとえば会話中に「神様を信じている」とか「信じていない」と話す程度の浅い信仰、もう１つはそれとは全く別の、『福音』に出てくるような深い信仰です。『福音』にはその種類の信仰の例がいくつも出ています。今日はそれらを引用して、神への信仰について理解します。例や物語を聞いて具体的にイメージすることは大事です。そうしないと浅い理解で終わってしまい、私たちの信仰も浅いまま、深まらないからです。

**深い信仰の例───ガンガーへの信仰**

ブラフマーナンダジーは「ガンジス川には５つの特徴がある」とおっしゃっていました。ガンジス川（ガンガー）の女神の名前はマザー・ガンガーです。ヒンドゥ教徒はガンガーの水を飲んだり沐浴をすると、マザー・ガンガーから５つの恵みをもらえると信じています。

①自分が選んだ神（イシュタ）への愛が生じ、それが増える。（イシュタ・バクティ・プラダーイニ）

②願いが叶う。（アビーシュタダーイニ　＊アビーシュタ（abhīṣṭa）＝願い）

③解脱ができる。（ムクティップラダーイニ　：ムクティ（mukti）＝解脱＝liberation）

④すべての汚いものがなくなる。（カルーシャナーシニ　＊カルーシャ（kaluṣa）＝汚いもの）

⑤堕落した人、罪人も解脱できる。（パティトッダーリニ　＊patitaḥ=fallen person堕落した人）

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは、ガンガーの水を持って西洋に行きました。スワーミージーはヴェーダーンティストでしたが、「ラジャス的なアメリカ人に囲まれているときにガンガーの水を飲むと、リシケーシやヒマーラヤを思い出して心が静かになるのだ」と言い、ガンガーへの深い信仰も持っていました。私の家でもそうでしたが、ヒンドゥ教徒はガンガーを信仰して毎日その水を使います。特に日食や月食といった特別な日には、すべての罪が消えて清らかになると共に、長い瞑想・厳しい訓練・神の御名の繰り返し・聖典の勉強などをせずに解脱できるので、それを信仰してガンガーには大勢の人が沐浴しにやってきます。

あるときシヴァ神とドゥルガー女神がそのことについて話していました。マザー・ドゥルガーは「この特別な日にたくさんの人がガンガーで沐浴しています。よかったです。これで皆清らかになって解脱できます」と喜んでいました。シヴァは「そんなことはない。聖典にはそう書いてあり、それを信じて皆ガンガーに来るが、しかし本当に信じている人はとても少ない」と言って、自分が言っていることを証明しようと、マザー・ドゥルガーを連れてガンガーのガート（川岸に設置された階段）へ行きました。

そして「私はあなたの旦那さんになって、あなたの膝の上で死んだフリをするから、あなたは泣いて『私の夫が亡くなりました。でもまだ生き返る可能性があります。100％清らかな人が夫にさわれば、生き返ることができるのです。でも100％清らかでなければ、さわった人も死ぬ可能性があります。どうか助けて下さい』と周りの人に頼んでください」と言いました。しかし妻が泣き叫ぶ言葉を聞いても、触ってあげようという人はいませんでした。

ですがある人──いろいろな罪を犯した罪びとでした──がそれを聞いて「おかあさん、ちょっと待っていてください。私はガンガーに沐浴に行って、100％清らかになって戻ってきます。そしてあなたの旦那さんに触ります。だから心配しないで待っていてください」と言って、ガンガーの恩寵で完全に清らかになって帰ってきました。旦那さんに触れると、旦那さんは生き返りました。シヴァはマザー・ドゥルガーに言いました、「大勢の人の中で、深い信仰を持つ人はたった一人です」と。私たちは神を信じていますが、それは浅い信仰です。

**深い信仰の例──神の御名への信仰**

牛乳売りの女性が毎日ある学者の元へと牛乳を運んでいました。学者の家に着くまでには川があり、舟で渡る必要がありましたが、船着き場にいつも舟があるわけではないので、時には遅くなることもありました。しかしその都度学者は「遅い」と言って怒るのでした。ある時学者は何の気なしに「ハリの名前を唱えれば世界の海でも渡ることができる。あんな川だったらハリの御名を唱えれば簡単に渡れるだろう」と言いました。

──「ハリ」は神（クリシュナ神、ヴィシュヌ神）の名前の１つで、「ハリ」の意味は「全ての罪を取り除く」という意味、そして世界の海とはよく世俗の海に例えられますが「大海」というイメージです──。

女性は翌日から毎日定時に来るようになりました。いぶかしく思った学者が理由をたずねると、「先生、なぜそんなことをおっしゃるのですか？　ハリの御名を唱えればあのような小さな川など簡単に渡れると教えてくれたのはあなたではありませんか？　だから私は毎日ハリの御名を唱えて川を渡っているのです」と答えました。「彼女にできるなら自分にもできる」と思った学者は女性と一緒に川を渡ることにしました。まずは女性が「ハリハリハリ」と唱えながら川の水の上を歩いて行きます。そして学者はというと、まだ川岸にいて、服が濡れないように裾を上げて川を渡る準備をしているではありませんか。女性は振り返って言いました、「先生、そんなことをしなくても大丈夫ですよ。ただ私のまねをすればいいんです」。

神の御名も唱えて、自分の服が濡れないように裾も上げている──それは矛盾です。ですがそれが私たちの状態です。私たちは神について聞き、勉強もしています。それでも深い信仰を持つのはとても難しいことのです。

**深い信仰の例──子供のような信仰の例、４つ**

『福音』の中から３つの例を引用しましょう。

**①『福音』３０６頁上段　L１**

これはジャティーラーという男の子の話です。通学途中に森があり、森には動物やお化けもいると考えて森を通るのが怖くてたまらないジャティーラーはお母さんに相談しました。すると母親は「怖いときにはマドゥスーダナという名前を呼ぶのだよ。マドゥスーダナはお前のお兄さんだからね。お兄さんの名前を呼べばお前と一緒に行ってくれるからね」と答えました。

──マドゥスーダナとはシュリー・クリシュナの別名で、「悪魔マドゥを殺した人」（スーダナは殺すという意味）という意味です──。

ジャティーラーはそれを信じて森に入りましたが、やはり怖くなって「マドゥスーダナお兄さん、マドゥスーダナお兄さん」と呼び始めました。ベンガル語で「ダー」（お兄さん）と言うのですが、「マドゥスーダナお兄さん、怖いから出てきてください。名前を呼べばお兄さんが出てきて、一緒に行ってくれるとお母さんが私に教えてくれたのです」と泣きながら叫んでいました。そして本当に神があらわれました。「怖がらないで。私がついているから安心しなさい。泣かないで」。それからは名前を呼ぶと、いつでも一緒に付いて行ってくれました。

シュリー・ラーマクリシュナはベンガル語で「バーラカヴァット・ヴィッシュワーシュ」（ヴィッシュワーシュは信仰、バーラカは男の子、ちなみにバーリカは女の子。ここでは「子供」という意味でバーラカを使っている）、これは子供のような信仰である、人はそれを持たなければならない、と言っています。

**②『福音』３０５頁下段　L１２**

昔の日本もそうでしたが、インドでも若い時に結婚する習わしがありました。これはとても幼いときに結婚してすぐ未亡人になってしまった女の子の話です。インドでの未亡人の生活は魚を食べてはいけないなどの制約がある厳しいものです。

その女の子は幼いので自分の旦那さんが亡くなっているという理解ができませんでした。そしてある時お父さんに言いました、「私の友達は結婚してみな旦那さんが来ています。なぜ私の旦那さんは来ないのですか？　私はとても寂しいです」。それを聞いたお父さんはなぐさめるために、「あなたの旦那さんはゴーヴィンダです」と言いました。

──ハリ、マドゥスーダナと神の御名が出てきましたが、ゴーヴィンダも神（クリシュナ神、ヴィシュヌ神）の別名です──。

それを何の疑いもなく信じた女の子は部屋のドアを閉めて「ゴーヴィンダ様、私の旦那さん。どうして来てくれないのですか？　来てください。来てください。私はとてもさびしいです」と泣きながら呼びました。その深い願いに抵抗できなくなった神は彼女の前に姿をあらわしたのです。

私たちは『福音』を読んでいます。しかし物語をおもしろく読んでも、物語の深い意味をくみとれているかは疑問です。本当の信仰の印は、どれくらいの憧れと熱望をもって神を信じるか、神に祈るか、神の名前を唱えるかです。そしてそれができれば、必ず神はあらわれます。では信仰があるのになぜ姿をお見せにならないのか、というと、それは私たちに熱望や信仰が足りないからです。

**③『福音』３０６頁上段　L１５**

家の祭壇の神像に、毎日お父さんがお昼ご飯を捧げています。しかしその日は用事があってできませんでした。そこで息子に代役を頼みました。息子はお母さんが作ったお供物を持って祭壇の部屋に入り、儀式をするためにドアを閉めて神像にお供えをしました。「神様、お供物を持ってきました。どうぞ召し上がってください」。しかし神像は何も答えません。動く気配もありません。息子は神像が食べるのをずっと待っていますが、像はピクリとも動きません。息子はだんだんお腹がへってきました。ヒンドゥ教徒はお供物のお下がりを食べるのが習慣ですから、まずは神様から食べてもらわなければなりません。しかし自分のお腹はへるが、神様はまったく食べてくれません。そこで「私はお腹がすきました。神様、すぐに来て召し上がってください。それともお父さんのお供えは食べることができるけれど、私のお供えは食べられないと言うのですか？」と泣いて叫びました。そのとき神が像から出てきてお供物を全部たいらげて像の中に戻っていきました。息子は喜んで、「お母さん、神様は全部召し上がりましたよ。どうぞお皿をさげてください」と言いました。母親は何もない皿を見て子供が全部食べたのかもしれないと思いましが、息子は無邪気に言いました「神様が全部食べたのです。喜んで召し上がっていましたよ」。この息子にはどれくらい深い神への信仰と熱望があるでしょうか！

**④ギリシャのある子供の話**

次はギリシャの物語です。ずっと雨が降らず、穀物が枯れ、飲み水も不足して困っている村がありました。この村では昔から、日照りや大雨などの自然災害の時には、皆で教会に集まり一生懸命に祈ると問題が解決する、と信仰されてきました。皆で教会に行く途中の話です。雲一つないカンカン照りの中、雨傘を持つ子供がいました。驚いて理由を聞くと、「祈るとすぐ雨が降るんでしょう？　だったら帰りに濡れないように、傘を持っていかなきゃ」。

**大人になるに連れ、信仰が減っていく理由**

シュリー・ラーマクリシュナは物語にあるような信仰があったら、絶対に神はあらわれる、悟りもできると言っていました。しかし物語はおもしろくても、子供のような信仰を持つこと自体は簡単ではありません。暗い夜に外出すると危険なので、親は子に「お化けが出るから夜は外に出たらいけないよ」と言います。すると子供はお化けの存在を信じて夜の外出を怖がります──なぜ幼い時には親の言うことを信じていたのに、大人になるに従いその信仰が減っていくのでしょう？　子供のときにあるものが、どうして年を取るとなくなっていくのでしょうか？

1つの原因は、経験（から得る学び）です。他人の言うことを信じてだまされた、などの経験によって、他人の言葉をうかつに信じることを避けるのです。次に推論能力（考えて識別する力：faculty of reasoning）の発達です。目に見えないものが本当に存在するか・しないのかはこの力で考えます。それから、心に否定的なもの（疑いや自己中心性など）が増えることも理由です。「私は正しくて、他は正しくない」と考えることが増え、たとえば悟った人を信じないのもこれが一因です。その一方、科学者の説は盲目的に信じる傾向が増します。以上のような原因から子供のときにあった信仰が徐々に減っていきます。

しかし、科学者の言うことは何でも正しいとか、本の形で出版されているものは何でも正しいと考え、自分の意見を持たない態度は適切ではありません。印刷されたものはすべて正しいと信じる男の話が『福音』にあります。

（👉p940　上　L12）*ある男が友だちに向かって、『私はいま、家が一軒恐ろしい音を立ててつぶれるのを見た』と言った。ところが、これをきかされた友だちはイギリス式の教育を受けた人だった。彼は『ちょっと待ってくれ。新聞で調べてみよう』と言って新聞を読んだ。しかし家が倒れたという記事は見いだせなかった。そこで彼はこの友だちに向かって、『いや、私は君の言うことは信じない。それは新聞に出ていないもの、うそだ』と言ったという。*

ですが興味深い事実は、私たちの本当の状態は、清らかな状態、深い信仰の状態だということです。なぜなら私たちの本性がそうだからです。私たちは子供の時にはパラダイス（楽園）にいます。それが徐々にパラダイス・ロスト（失楽園）します。

前の理想的な状態（子供のような信仰）に戻ることが私たちのチャレンジです。サムスカーラという点でも、生きていくあいだにそれが増えていくことを考えると、チャレンジは容易ではありませんが、しかしチャレンジはそれです。そのために、最初は浅い信仰から始めて、徐々に信仰を深めていきます。ではその方法には何があるでしょうか。

**深い信仰を育てるには**

最初のステップは、「神は存在する」と信じることです。

・神は本当に存在している。

・神は全知全能遍在である。

・私は神の子供である。

・神はいつも守ってくださっている。

・神はいつも面倒を見てくださっている。

・神はいつも言うことを聞いてくださる（いつ叶えるかについては前回のテキストデータを参照してください）

という信仰です。

次のステップは、神への愛を増やすための実践です。

①神について聞き、学び、神の御名を何回も唱える。［＊神と神の御名は同じである］

②心を清らかにする実践も行う。心が清らかになると神への信仰も増えるからです。

③そのような努力と共に、神の恩寵も必要なので「神様、あなたへの信仰を増やしてください」と神の恩寵を深く祈る。

**ヨーギン・マー**

ですが深い信仰を持っている人でも浅い信仰へと堕落する可能性があり、これは高いレベルの信者にも起こり得ることです。1つの例が、付き人のようにホーリー・マザーをお世話したヨーギン・マー（ジョーギン・マー）です。ヨーギン・マーの霊的境地はとても高く、シュリー・ラーマクリシュナもホーリー・マザーも認めるところでした。彼女はホーリー・マザーが母なる神の化身であることも知っていましたし、アベダ―ナンダジーが作ったホーリー・マザーの賛歌「Prakritim paramam」（👉CD『シュリー・ラーマクリシュナ・アラティ』7曲目）の中でも歌われていますが、ホーリー・マザーの清らかさは実践によって得た清らかさではなく、ご自分自身が清らかであるのだ、つまりご自分の本性そのものが清らかさである、ということも理解していました。

しかし突然ヨーギン・マーの心に疑いが生じたのです。それは「ホーリー・マザーの姪ラドゥに対する態度は、ホーリー・マザーの執着のあらわれではないか」という疑問でした。はたから見ればホーリー・マザーは一介の主婦でした。

ある日、毎日の日課のためにガンガーで沐浴していたヨーギン・マーに、ヴィジョンがおとずれました。とても汚いものがガンガーを流れていったのです。そしてシュリ―・ラーマクリシュナがあらわれ、「ほら、見てください。あんなに汚いものがガンガーを流れていきます。でもだからと言って、ガンガーが不純になりますか？」と言ったのです。

いいえ、不純にはなりません。水源近くのリシケーシのガンガーの水はとてもきれいで、コルカタのガンガーの水は汚れていますが、ガンガーの「清らかさ」という特徴は変わりません。ガンガーの5つの特徴は、ヒマーラヤのガンガーであってもコルカタのガンガーであっても同じなのです。シュリー・ラーマクリシュナは、「ガンガーに汚いものが流れてもガンガーは清らかです。サーラダー（ホーリーマザー）も外から見たら汚いものがあるように見えても、清らかであることに変わりはないのです」とヨーギン・マーに伝えました。マザーの元へ行きすべてを話したヨーギン・マーは、マザーにプラナームをしました。マザーは「気にしないで大丈夫」と言ってなぐさめたといいます。このように、深い信仰を持っている信者にも疑いが生じることがあるのです。

**ギリシュ・チャンドラ・ゴーシュ**

シュリー・ラーマクリシュナの弟子たちの中で、もっとも信仰深い人物は誰でしょうか？　それはギリシュ・チャンドラ・ゴーシュです。ギリシュの信仰は100％であると、シュリー・ラーマクリシュナご自身もおっしゃっていました。ギリシュはシヴァとドゥルガーの話に出てきた罪びとのようです。彼は多くの非道徳的なことをしてきましたが、「シュリー・ラーマクリシュナの恩寵によって自分の罪はすべて清められた」という尋常ではない深い信仰を持っていました。シュリー・ラーマクリシュナの恩寵で、本当に、ギリシュは罪びとから聖者になったのです。

女神ドゥルガーの名前を唱えながら亡くなると、犯してきた罪がすべて消えるという賛歌があります。

👉『福音』３８頁下段

*もし私が、ドゥルガーの御名をとなえつつ死ぬことさえできるなら、*

*どうしてあなたが、おお聖き御方よ、*

*私に救いを拒むことがおできになりましょう、（私を救ってくれない、などということがありますか？）*

*たとえ私が、みじめな奴でありましょうとも………*

ギリシュは「シュリー・ラーマクリシュナはアヴァターラである」という燃えるような信仰を持ち、「今回シュリー・ラーマクリシュナが化身となってこの世界にあらわれたのは、私の解脱のためです」と言っていました。決してスワーミー・ヴィヴェーカーナンダやブラフマーナンダジーのような清らかな人のためではなく、罪びとを守るためだと思っていたのです。神の化身、アヴァターラの（一つの）特徴が罪びとをまもるためにこの世界にあらわれることでしょう？　イエスもそうでした。

これはシュリー・ラーマクリシュナの肉体がなくなってからずっと後の話です。滅多にガンガーで沐浴しないギリシュが、その日は沐浴しながら何かをつぶやいていました。ギリシュが罪びとから聖者になったことを知る信者が、何をつぶやいているのかと興味をもって聞き耳をたてると、聞こえてきたのはマントラではなく、なんと「マザー・ガンガー、私はシュリー・ラーマクリシュナの恩寵で清らかになりました。だから今はあなたを清らかにするためにあなたの中に入って沐浴しています」という言葉でした──これがどれくらい深い信仰か、考えてください。

（20200607『福音』勉強会　以上）

（講義後の賛歌奉献は♪ラーマクリシュナ・シャラナム）